

特集

社会認知研究の最近の動向

特集にあたって

村井俊哉*

社会神経科学 social neuroscience という研究領域が提案されてから 20 年を超え、精神医学の分野に限っても、社会認知 social cognition をテーマとした研究は歴大な数に及んでいる。本特集に先駆けて、すでに一般精神科医向けの雑誌でも社会認知・社会神経科学については繰り返し特集が組まれているし、精神科関係の学会シンポジウムでもこのテーマが取り上げられる機会が多い。結果として社会認知・社会神経科学は、この領域の研究に直接携わっているわけではない一般の精神科医にとっても比較的馴染みのある概念となっている。

このような状況を踏まえ、今回の特集では、精神疾患についての社会認知研究を網羅的・体系的にカバーすることを目指すのではなく、この領域の第一線で活躍する研究者に、社会認知という広大な研究領域の中でそれぞれテーマを絞って、最近話題となった研究を中心に執筆いただくことをお願いした。本誌の読者は臨床精神科医が多数派であると想像するが、そのような読者の皆さんにこの研究領域の広がりを感じていただくために、

執筆陣には動物研究や乳児研究を専門とする研究者にも加わっていただいた。

精神医学領域における社会認知研究は、その成立当初から、認知心理学、精神医学、神経画像学など多様な研究分野を含む、学際的色彩がきわめて強い領域であった。加えて最近では、理論的基盤としては発達という視点の重要性がますます認識されるようになり、研究の方法論としては、トランスレーショナル研究への期待がますます高まっている。すなわち、本研究領域はここにきてその学際性の程度をさらに強めている。一方、臨床現場では、社会認知障害を治療の介入点とみなし、薬物療法・非薬物療法双方の開発が精力的に進められている。すなわち研究と実臨床のギャップが少しずつ狭まりつつある。

社会認知は、自閉スペクトラム症、統合失調症、うつ病など、きわめて広範な精神疾患の臨床において、臨床医が日々考慮せざるを得ない心理機能である。読者の皆さんが本特集の中に患者理解のヒントを発見されることを願う。

* 京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座 (〒606-8507 京都府京都市左京区聖護院川原町 54), MURAI Toshiya : Department of Neuropsychiatry, Graduate School of Medicine, Kyoto University, Kyoto, Japan